

川東 輝弘 『高島亀太郎伝 南伊予政治経済史』

Yasuhiro Kawahigashi, The biography of TAKABATAKE KAMETARO

山口 由 等

Yoshito YAMAGUCHI

本書は、高島亀太郎という実業家・政治家の生涯を通して、20世紀前半の宇和島・南予地方の歴史を描き出している。高島亀太郎（たかばたけかめたろう、1883～1972）をもっとも分かりやすく紹介しようとするなら、戦時中（日中戦争・太平洋戦争）の衆議院議員であり、日米開戦時の宇和島市長（代議士と兼職）でもあるということになろうか。この時期をピークに地方政治家としても長年にわたって活躍するが、戦前は宇和島で有数の製糸工場の経営者として、さらに戦後も山林・住宅の大地主・家主として活動するなど、政治・経済にわたる地域の実力者であった。こうした亀太郎の地域の代表としてのキャラクターによって、本書は戦前の地域と県や国レベルとの関係、とくに人的な繋がりを生々しく描くことになっている。その亀太郎の残した日記や家業の記録を初めとする膨大な資料群は、現在は松山大学に寄贈され、さらに「高島亀太郎文庫資料目録」として目録が作成・公開されており、愛媛新聞社から『高島亀太郎日記』全5巻も刊行されている。しかし、生の資料群に眼を通す作業はもとより、満14歳から死去する89歳までの足かけ76年にわたる公刊日記を通読するのは骨の折れる作業で、多くの人にとっては現実的ではない。したがって、関連資料や南予・宇和島の歴史に関する参考文献も参照し、高島文庫の資料群から明らかとなる地域の歴史を一般の眼に分かるよう

な形で提供したことが、本書による最大の貢献といえるだろう。

本書の「あとがき」によると、そもそも高島文庫の資料群は、主に大正期に活躍した挿し絵画家である高島華宵（かしょう・本名は幸吉）の研究を進める中で、その兄である亀太郎に関する資料が大量にみつき、ご子孫が松山大学に寄贈されたものとのことである。若くして宇和島を離れて東京方面で活躍した華宵の人生も、都会熱に引き寄せられた地方青年として、さらにまた大正期の都会文化の爛熟の一端を担った文化人として興味を惹かれるものがある。そうした華宵と、彼とは対照的に都会熱の時代に地方に残って家業・家産を守り抜いた亀太郎と、この兄弟の対照的な人生そのものが時代を反映しているといえよう。

ここで、高島家ならびに亀太郎のプロフィールについて、本書にしたがってより詳しく紹介しておこう。高島家は宇和島藩主伊達家の初代の時代から続く商人の家がらとのこと、明治期になって亀太郎の父・和三郎の代にそれまでの小間物商から生糸の専門商に転じている。和三郎は比較的若く40歳で亡くなったために、亀太郎が21歳で家督を継ぐことになるが、この前後から亀太郎は製造業への進出を考え、タオル製造を試みるなどした後、生糸商から製糸工場経営への転換に乗り出すことになる。また、亀太郎は若い頃から地域でのリーダーシッ

ブにも関心が強く、政党活動にも積極的に参加し、大正期から昭和初期にかけて県会議員、県会議長、衆議院議員、宇和島市長などを歴任する。戦後は冒頭に紹介したような戦時期の政治活動のために公職追放を受け、また本人も政治的顕職には関心を持たなくなり、保守政党の長老として政治家間の調停活動をするに止まった。

本書の構成は、5年または10年ごとに地域・経済・政治・家族の4つのテーマでそれぞれの動向を紹介するという、いわば編年体に近いものである。また、中心的な資料となっている日記の内容を反映する形で、宇和島や南予、愛媛県の地方政治の動向にかなりの紙幅を割いている。そこでは、地方政治における混乱ぶり、選挙における生々しいエピソード、議会中の議員同士の駆け引きなど、どちらかといえばダティな実態が繰り返し明らかにされる。亀太郎自身は特定の会派にびたりと寄り添うタイプの政治家ではなかったため、こうした泥臭さからはやや距離を置いた場所にいたようである。有和が最優先される総動員体制の下で代議士や市長に選ばれたことも、そうした政治スタンスを反映したものだったのかもしれない。このように、戦前期の地方政治の生々しさを伝えているのが本書の特色ではあるが、評者は社会経済史が専門なので、経済部門を中心に両大戦間期以降の日本社会の動向と地方の関係などに関して気がついた点などを紹介していきたい。

いうまでもなく著者の川東氏も経済史が専門であり、家業に関しては日記だけでなく断片的な経営資料や、県統計、業界資料などを用いて、叙事的な日記資料の限界を補おうと努力している様子が伺える。それでも、日記の散逸などもあって家業の動向を継続的に詳細に分析することは難しかったようであるが、総じて昭和に入ってから製の糸業の動向をかなり明らかにしているといえよう。高島家の家業の推移を紹介すると、戦前の中心事業である製の糸業は、大正期(1915年)に進出した後、利益と損失の激

しい変動を繰り返すとともに長期的には行き詰まりの傾向にあり、亀太郎はなんとか経営を打開しようと格闘し続ける。具体的には、販売価格維持や品質改良のために新型設備の導入や技術改良などに努める一方、養蚕組合との特約契約による繭の確保、養蚕家との価格交渉、女工の労賃切り下げ、県や国会での業界人としての政治活動、県技術者との見解の対立などの動向が明らかにされている。この間、県の製糸業組合長を1937年から務めたのは、有数規模の工場経営者だったということもあるが、周囲から議員としての政治力にも期待されていたのであろう。(すでに議員ではなくなっていたものの、戦後の製材組合長や家具商工業共同組合長の場合にも、政治力への同様の期待があったと考えられる。)南予の養蚕・製糸は大洲などでは戦後もしばらく続くが、亀太郎自身は戦時企業整備に応じて1941年に製糸業を廃業し、国民更正金庫から補償金を受け取っている。その後、戦時中は小規模な海運業、木造飛行機の開発などの事業に取り組んだが、時節がら、原燃料・資材不足のために十分な事業活動をできたとは言いがたかった。一方で、亀太郎はこの頃から製の糸工場跡地の宅地化や他工場跡地の売買、山林の買収など不動産事業を始める。戦後の家業はこうした不動産経営を中心としつつ、木工家具の製造・販売などを続けるものの次第にじり貧となっていった。

こうした高島の事業と宇和島の経済的動向の歴史を概観すると、両大戦間期の日本の社会経済の動向が宇和島のような地方都市にも着実に反映されていたという印象が強い。大正から昭和初期は大都市でも都市化がそれまで以上に本格化した時代であるが、宇和島でも埋め立て事業や宅地化の進展、交通機関の発達と交通事業の拡大、製造業の進出などがみられ、明治末期までの陸の孤島といわれた状態から様変わりしている。その後の戦時期から戦後復興期にかけても、企業整備、住宅問題、事業者と税務署のトラブルなど、この間の日本の経済の動向と符

合した動きがみられる。これに対して、高度成長期の宇和島は、日本経済の発展から取り残された停滞性が本書では強調されている。もっともこれは、地域間格差の拡大という高度成長期の一側面を反映しているものでもあるから、日本の社会経済史を一地方からみるという観点の重要性は同様であるといえる。そうした中でも、高度成長期の「洋」家具製造への転換、公共施設への家具納入を中心とした事業（つまり官需への依存）、持続的なインフレを背景にした借家人との争議など、それぞれ戦後経済の一コマを映すエピソードをみることもできる。高島家の事業は、こうした宇和島経済と日本経済の繋がり弱体化とも関わりながら大きく性格を転換していったとみられる。象徴的なのは、戦前期には養蚕・製糸という地域の産業と強い結びつきを持っていたのに対して、その衰退後は蜜柑栽培へと転じた地域農業との関係を持たなくなっていることである。また、周知のように漁業は宇和島のもう一つの主要産業であるが、高島家の場合はこれと深い関わりを持つことはなかったようである。

以上のように、人物を軸に地域史を描き出す本書には、亀太郎のような政治家と実業家を兼

ねるタイプの地方有力者の大きな時代の流れに沿った長期的変化と、日々の具体的な活動のあり方の両方が示されている。後者に関して気になった点を記しておく、時期にもよるが政治家としての亀太郎の活動はかなり多忙であり、そうした中での家業の経営方法はどのようなものだったのだろうか。戦後の家具製造業では、亀太郎がすでに高齢となっていたこともあって孫や幹部が実質的な経営管理者であることは明らかである。同様に、戦前期にも家業の実際のマネジメントは別人物（工場幹部層など）にかなり委ねていた部分も大きかったのではないだろうか。それが亀太郎の活発な政治活動の前提となっているように思われる。ただし、昭和恐慌期に行われる製糸工場の設備更新に典型的にみられるように、亀太郎自身が重要な意思決定や技術的検討、操業改善活動などに幅広く参加しており、それは所有と経営の分離といったようなものではなかったことも確かである。こうした亀太郎の活動内容は地方政治家・実業家のあり方の例として、一つのイメージを与えてくれるものといえよう。

（2004年、ミネルヴァ書房、410頁）